

第27回 すががわ国際短編映画祭



中山 秀一

今年で27回を迎える「すががわ国際短編映画祭」は、コンペティションのない庶民的な映画祭として、この須賀川の市民にすっかり定着している。上映ホールでは、筆者の後ろの席で観ているおばさんたちが、けっこう難解な作品にも、素直に笑ったり驚いたりして、ひそひそ話が聞こえてくる。

都会のシネコンでは上映中の私語は禁止だが、この映画祭では、気楽に映画を楽しんでいるようで、この雰囲気は「すががわ映画祭」なのだと思う。

早くも4年になる東日本大震災では、ここ須賀川も被害を受けて、市庁舎は今も分散して仮住まいをしているが、街の復旧の方は進んでいる。

須賀川城の本丸跡といわれる「二階堂神社」は、鳥居も社殿も壊れたが、今回訪ねてみたら、社殿は建て替えが進み、桧造りの真新しい姿が完成間近であった。現場にいた宮大工の棟梁に話しかけると、色々と説明をしてくださり、須賀川城の古い図面のコピーまで頂いてしまった。皆さん親切である。

なお、この本丸跡の周辺には、震災の被害で更地となった地域があり、そこでは遺跡の発掘が進められ、お塚の一部が昔の姿を現していた。

さて、今回の上映作品は全部で31本にもなり、製作国は日本が17本、海外が14本で、海外作品は、フランス、イスラエル、スウェーデン、カナダ、デンマーク、ノルウェー、ポーランド、ラトビア、アルゼンチン、イタリア、ニュージーランド、などの多彩な国にわたっている。

また、アニメーション（人形アニメ2本を含む）の本数が14本で、全体の約半数を占めている。その作風は、立体的でリアルなCGアニメ、古典的な手書き風アニメのほか、アートアニメといわれる、平面的な切り絵風の画像で構成したアニメが、外国作品に多かったように思う。

このような海外からの作品を観ていると、遠く離れた国であっても、「映像」という表現をとおして、人々は共感し理解し合えるのだ、ということ強く感じる。

作品の内容は、ドキュメンタリー、伝統文化や技能の紹介、科学記録、アニメーシ

ョン等々多様で、アニメでは、解りやすい物語形式から、グラフィックアート系の作品など実に豊富な内容だ。アート系のアニメは「この作品は何を言いたいのだろうか？」などと理屈は考えず、素直に感覚で受けとめるのが鑑賞のツボのように思う。

とくに今回筆者が驚いたのはフランスの短編で、意味不明のキリンが何頭も行列で現れ、屋内のダイビングプールで飛び込みの華麗な技を披露する作品だ。いかにもフランスらしい、考えもつかない発想の作品で、後席のおばさんたちは大喜びであった。

なお、最近はデジタル上映万能の時代だが、今回は35mmフィルムによる上映が2本あり、このホールの専用映写室から映写された。昔ながらの2台の映写機によるA/B切り替えもスムーズで、映写機と映写技師が共に健在なのが嬉しい。35mmの上映作品は2本とも、文化庁の企画による、日本の伝統工芸の記録映画である。

☆上映プログラム

上映は、9日と10日の2日間にわたり、朝10時から夕方5時まで、昼休み



写真1 須賀川城の本丸跡・二階堂神社は桧造りで再建



写真2 震災で更地となった場所を発掘、お塚の跡が出現



写真3 ホールのロビーでは地元の主婦たちが特産品を販売



写真4 直木賞作家の山本一力氏がナビゲーターを務める



写真5 ゲストトーク・左から後藤康文医師、瀬川徹夫氏、司会の金山芳和氏

の40分間と10分の休憩をはさんでみっちり上映される。

ホール横のロビーでは、地元の主婦たちが手作りの弁当や、須賀川特産の野菜の煮物やもち菓子などを売っており、地元住民のお年寄りから子供たちまで、この映画祭を楽しんでいる。

映画祭には「招待作品」が上映され、そのあと、製作に携わったゲストを迎えて、トークセッションが行われるのが恒例で、それは初日の9日午後一番で始まった。

☆『灯り続けた街の明かり～みちのくの医師の信念～』

日本・2014年、BD、ドキュメンタリー、45分

今回の招待上映作品は、岩手県宮古市の開業医・後藤康文院長が主役である。後藤院長は過去の資料に学んで、震度7の地震と、20メートルの津波にも耐える、4階建ての防災ビルとして医院を建設した。その先見性を備えた医院が、今回の東日本大震災で、大きな威力を発揮した事実を伝えるドキュメンタリー作品だ。

この作品は(株)永井プロジェクトと(株)シネバザールが製作している。そして有名な録音技師・瀬川徹夫氏が企画をたて、演出にも参加している。そして、直木賞作家の山本一力氏が、ナビゲーターとして現地に出向き、インタビューを行っている。

後藤康文院長が経営する後藤医院は、皮膚科と泌尿器科が専門で、映像を見ると人工透析のベッドが20

ほどあり、患者が常時透析を受けている。作品は、山本ナビゲーターが、後藤院長へのインタビューを中心に、医院に関わる周囲の人たちにもインタビューして、今回の津波に後藤医院がどう対処したのかを浮き彫りにしている。

震災で、宮古市、岩手県全体が停電になった。後藤医院は4階建ての屋上に災害用の自家発電を備えていたので、10分後には院内に必要な電気が復活した。地震のあとには、津波がくるから、そのときにはうちの医院に避難するように、後藤院長は近所の人たちに伝えていた。自家発電のおかげで、院内ではテレビで津波襲来のリアルな映像も見ることができた。そして、翌日には透析を再開することができた。

もちろん1階の内部は津波でめちゃめちゃに破壊されたが、4階の屋上と地上の安全な場所に、発電用の燃料6,300リッターを備蓄してあったので、1週間もの間、200KWの自家発電による電力で、院内の暖房も、人工透析も続けることができた。

夜になると、全く明かりのない暗闇の街に、後藤医院の窓が、オアシスのように明るく灯っているのを見ると、安心と希望を感じた、と周囲の人々が証言している。

このように、今回の災害で、大変な威力を発揮した医院の災害対策は、災害がなければ余分な費用になるのだが、後藤院長はどのような理由で採用したのだろうか。山本ナビゲーターの質問に、「患者さんの数が増えているので、何かあったら大変なこと

になる、という恐怖感のようなものがあつたのは事実です、何か起きてからでは遅い、というのが私の信条です」。決して「過去に学んだ」とか偉そうなことは言わずに、淡々と医師としての責任を語る後藤院長の映像から、先生のお人柄がにじみ出ている。

先生は、津波が来る前になると、患者をすべて3階と4階に避難させて、それを確認してから最後に階上へ避難したという、船の船長のような責任感だ。医院の従業員は、階下にあったパソコンのサーバーなどを、すべて階上に移して、患者のデータを失うことを防いだ。

「このように、被害者を出さずに乗り切れたのは、みな従業員のおかげです」と語る後藤院長の言葉が実に印象的である。なお、今回の後藤医院の災害対応は、行政も注目して採用するということだ。

☆ゲストトークセッション

上映後、映画の主役・後藤康文医師と、この作品を企画した瀬川徹夫氏を迎えて、当映画祭の東京実行委員会・金山芳和氏の司会で行われた。

金山氏から、須賀川の皆さんにも、ぜひこのような作品を観て頂きたいという思いで、今回の上映となったことなどの挨拶があった。

瀬川氏からは、この作品の企画意図について、自分が盛岡市出身なので、故郷のことだから何かやらなければと考えていたが、出来ることは映画の中でしかないと思った。後藤先生の講演を聞いて大変感動したので、調べてみたら、宮古市にもその事実を知らない人がいた。これは記録して残さなければと思ったのが、この作品を企画する動機となった。

後藤医師からは、街は全部電気が消えているが、当医院は自家発電でテレビが見られるので、災害の生々しい状況はよく解った。しかし、それに対するこちらからの発信は、通信手段がやられているので、どうすることもできなかった。

それがいつまで続くのか、不安であったが、自分のことは自分でやる、ということ



写真6 『字のないはがき』目黒にあった向田邦子の家族



写真7 ビデオショップでアルバイト店員の高校生カップル



写真8 細川紙の製造工程を、原料から完成まで克明に記録

が今回学んだことであり、それを後世に伝えることが出来ればと思っている。

☆『字のないはがき』

日本2002年、DVD、アニメーション18分

この作品は、中学生の教科書にもなった向田邦子の名作随筆を、学習研究社の企画製作により、アニメーションで映像化した2002年の作品である。さきの大戦末期に行われた「学童集団疎開」に行かされた小学1年生の末娘に示す、几帳面で頑固な父親の愛情を描いている。アニメの画風は、ごくオーソドックスな手書き風の描写で、美しく親しみやすい映像だ。構成は、長女であった向田邦子の目線で画かれ、ナレーションも長女が語る形式で、解りやすい語り口である。

1945年3月10日、歴史に残る東京大空襲で、目黒区にあった向田家の家は奇跡的に焼け残った。すでに下の妹は疎開していたが、一家全滅になるよりはと、小学一年生であった末の妹を、学童集団疎開に出すことになった。あまりにも幼く不憫だと、今まで両親のもとから手放さなかったのだ。

父親は、本来が照れ性で、軟弱な愛情表現が下手なため、頑固を装っているが、妹の出発前に大量のはがきを仕入れて、そのすべてに父親あての宛名を書き入れた。そして、それを妹に手渡し、「元気な日にはマルをかいて、毎日ポストに入れなさい」と言って聞かせた。

やがて疎開先から届いた最初のはがきには、紙面いっぱいにはみ出すほどの威勢の良い大きなマルが、赤鉛筆で書いてあった。しかしやがて、マルは小さくなり、ついにはバツ印に変わり、ついにはバツも来なくなった。

実は、妹は病気になっていたのだ。母親が迎えに行くと、妹はシラミだらけの髪で寝かされていた。家では、妹を歓迎するために、弟と一緒に家庭菜園のカボチャを全部収穫して妹の帰りを待った。帰りを見張っていた弟の「帰ってきたよ！」の声に、父親は裸足で外に出て、月明かりの路上で妹を抱き上げ、恥も外聞もなく大きな声を上げて号泣する、というエンディングである。普段は頑固な父親の初めて見せる肉親への愛情表現に、筆者もついもらい泣きしそうになった。

筆者がこの映画に特別の感慨を持ったのは、当時筆者も学童集団疎開で、仙台の北、北上川の上流にある登米（とよま）町のお寺に居たのだ。ただし年長組の小学6年生である。この映画と同じように、お寺の本堂の大広間に布団を敷きつめて、学童が一同に雑魚寝をしていた。この映画にも全く同じシーンが現れたので、一瞬にして当時の自分にタイムスリップしてしまった。二度とこのような時代が無いように願いたいものである。

☆『ビデオ店 Video Store』

ポルトガル2014年、DVD、ドラマ、17分36秒

ビデオショップでアルバイトをしている若い男女の店員は、高校のクラスメイトのカップルで、教室では前後の席で隣りあわせだ。

アルバイト先のビデオショップには、まだDVDのプレーヤーを持っていないお客もいるのだが、VHSテープのレンタルを初めてDVD専門店に切り替えることになった。そこで、廃棄処分になるVHSを、日ごろVHSに親しんで借りに来てくれる常

連客に、感謝の気持ちを届けるため、無料で配って歩くことになった。

店が終わってから、二人は、カートにVHSを積み込んで、顧客の好みに合わせたタイトルを選び、ポストに入れて歩く。二人はビデオショップに勤めるだけあって、大変詳しい映画ファンでもある。VHSを配りながら、「『グレンリン』は見た?」とか、楽しそうな会話が弾む。この配達は二人にとって、愛を育むデートにもなっていたようで、小さなラブストーリーだ。

この映画は、多分製作者が大変な映画好きで、しかも長年親しんだVHSがその使命を終わり、DVDというデジタル媒体に代わることに、ノスタルジーを感じて制作したのではと思う。

ビデオショップでのバイト二人の会話がおもしろい。女性「『パルプ・フィクション』と『トレインスポッティング』の寄せ集めにはうんざり」、男性「タランティーノ作品は香港シネマのコレクションだからね」、男性「この作品はおすすめ、ヴィニー・ジョーンズが素晴らしい」、女性「素晴らしい?元サッカー選手がギャングスター役?」、中年の女性客に、女性「アデレードさん『カサブランカ』ですか?」、女性客「これはなんなの?」、女性「DVDです」。

女性「スターウォーズは処分してはダメよ、神への冒瀆だわ、どうか私たちにお力をお与えください!、私スターウォーズのパジャマを持っているの」、男性「おお、君はスターウォーズ狂だね」、女性「ありがとう!」、男性「『アマデウス』を知ってる?親友と一緒に『アマデウス』を観たんだ、ひどく興奮して、自分がモーツァルトでぼくがサリエリだと一年間言い続けた、あいつを殺してやりたかったよ一年間ずっとね」、女性「なんて素敵なお思い出かしら!」



写真9 まか不思議なキリンの集団がダイビングで乱舞



写真10 地震、津波、放射能、の三重苦で集団避難の記録

等々である。

☆『細川紙』

日本 2014年、35mmフィルム、39分

この作品は文化庁の企画で、埼玉県の比企郡小川町および秩父郡東秩父村で継承されている、手漉き和紙の製造工程を克明に撮影した、35mmフィルムによる記録映画である。

この手漉き和紙の伝統技術は、昭和53年に、国指定重要無形文化財に指定され、細川紙技術者保存協会がその保持団体に指定されている。

この作品は、後述の「名塩雁皮紙」とはやや作風が異なり、工程を細部にわたり丁寧に記録している。材料となる植物「こうぞ」の皮の採り入れからその処理、「ねり」と呼ばれる粘着材として、「とろろあおい」が使われるが、その処理と添加方法等々が紹介される。

これらの原料から手漉き作業、乾燥方法までを、忠実に撮影しており、多くの人手を経て完成する細川紙の特徴を理解できる貴重な記録資料である。

☆『5 METERS 80』

フランス 2013、BD、5分23秒

これはフランスの作品で、プールの飛び込み台に通じる通路に、キリンたちが次々と現れて、華麗なるダイビングを敢行披露する、という奇抜な作品である。世界各国の受賞歴は、なんと29回にも及ぶ。

大きなダイビングプールの飛び込み台に通じる、らせん状の回廊は内部が白の縞タイル張り、その一角からキリンが続々と出てきて行列となり、上階にある飛び込み

台に向かって歩き出す。その歩きっぷりは、長い脚がキリン特有のスローモーションのような動きをするので、本当にCGなのかなあ、と疑いたくなるほどのリアリティだ。

その行列の一匹がひょうきん者で、列から外れてこちらのカメラのレンズに向かって、なめるばかりに近寄ってきて、唇をパクパクさせながら舌を出して愛嬌をふりまく。ひょっとするとこれはCGではなく実写なのかな？いや絶対にCGだ！と考えさせるほどのリアルな出来栄だ。

一行が飛び込み台に現れると、その上には別のキリンが、空中ブランコのように逆さまに吊られている。キリンたちは、ジャンプしてその吊られたキリンにキスして一回転して飛び込む。そのうちに別のジャンプ台からもジャンプが加わりキリンの数が増えて壮観となる。

ハイスピードのスローモーションも、優雅な水中撮影もありで、画面は、キリンたちの飛び込み乱舞のような風情となる。これだけの話だが、妙に面白い、それは徹底してリアルなCG映像の仕業だろうか。

☆『原発の町を追われて』（オリジナル版）

日本 2012年、DVD、ドキュメンタリー、30分

今年は東日本大震災に関するドキュメンタリーが2本上映された。1本目はすでに述べた『灯り続けた街の明かり』で、この作品は、宮古市の地震と津波の問題であったが、こちらの作品はそれに加えて、第一原発による「放射能」の災害である。そして、前者が組織的に制作しているのに対し、これは個人が制作した作品という印象だ。

福島第一原発の城下町のような存在であった二葉町の全住民が、事故直後、着の身

のまま避難した。最初の避難先は埼玉県のスーパーアリーナで、町役場の機能と共に1,400名が避難してきた。その後、新たな避難先として同県加須市の、現在廃校となっている旧県立騎西高校へ移転をしている。ここでは、アリーナとは異なり、校舎と合宿所、二つの体育館などを備えているので、それらを利用できるが、不自由な生活であることは間違いない。この作品は、このような避難生活者たちの一年間を追ったものである。故郷を追われた避難者のさまざまな声を、3人のカメラマンが丹念に撮影収録しており、彼らの「本音と建て前」との間に、揺れ動く心情を浮き彫りにしている。

その避難生活者たちの声は「毎日毎食弁当を食べてる、たまには自分で料理したものを食べたい」「毎日寝たり起きたり、話もしない、他人の悪口は言いたくないから(91歳のおばあさん) 毎日毎日、ホワイトボードに「あいうえお・かきくけこ」と書いては消している老人、彼の息子さんは渡邊翠峰という知名な書道家で、避難所で子供たちを相手に書道教室を開いている。「寝ている間はどこに寝ているかわからないが、起きると、ああここは二葉町ではない、避難所なのだ」と悟る毎日、書道教室をやっているときは避難所ではない・・・」。先生は書き上げた子供には思いっきり固い握手をして褒める。東電が、賠償額の提示に避難所を訪れた。「社長が謝りにも来ないで、賠償額を決めるとは何事だ!」「東電には親の代から職で世話になっているから感謝をしている、二葉町民のほとんどが東電の世話になっている」、と認めながらも東電と国に対して怒りの声を上げている避難所の人たちの心境は複雑だ。中には、事故直後から、率先して防護服を着て、1週間も敷地内に留まったという中年の男性もいる。町民と原発は切っても切れない関係にあったのだ。このドキュメンタリーの企画したのは、堀切さとみさんという女性で、撮影にも参加して、編集と、ナレーションも兼務するという一人三役をこなしている。この作品を観て感じたことは、3人のカメラ担当のうち2人は素人だと思われる。同録の音声はカメラマイクを使うので、よい音を取るためにワイドレンズで被写体の近く



写真 11 名塩雁皮紙の名工・谷野剛惟のわざを紹介

から撮影している。したがって顔が歪んで写るが、それが不思議とリアリティを感じさせる。しかも同録の音声はすべてクリアで聞き取りやすい。それから、ナレーションも当然素人なので、プロのナレーターのように、妙な気取りや自己演出がなく、淡々と説明しているのが大変さわやかでよかった。とかく最近の女性ナレーターは、男に媚びるような甘い語り口が多く、筆者には好感が持てない。

☆『名塩雁皮紙～谷野剛惟のわざ』

日本 2013 年、35 mm フィルム、ドキュメンタリー、30 分

先に紹介した「細川紙」と同様に文化庁の企画で、伝統的な和紙「名塩雁皮紙」の製造を解説している。前者が作業工程を克明に撮影しているのに対し、こちらは工程よりも、「名工・谷野剛惟」を演出するために、象徴的なイメージショットを多用している。

名塩雁皮紙は、兵庫県西宮市名塩市に伝わる伝統的な和紙である。製造工程で泥を加えることにより、雁皮の繊維と泥が一体となり、虫害や伸縮がなく、変色もしにくく、耐火性にも優れていると言われる。

この作品で、名工・谷野剛惟氏は、両手幅いっぱい大きな「すけた」にすくい取った原料を、隅々まで目配せして、小さなゴミや異物をつまんで取り除く。控えめな人柄だが、その作業中の顔は別人のように真剣で、ひたすら紙漉きに打ち込む姿は、観る者を引き付ける。



写真 12 この「笑わん少女」と写真師との関わりが物語の軸

☆『写真館 The Portrait Studio』

日本 2013 年、BD、アニメーション、17 分

この作品は、明治初期に描かれた、鹿鳴館や汽笛一声新橋駅、などの版画を思わせるような、レトロ調の画風で画かれており、何とも言えない魅力だ。

時は昭和初期の頃か、一軒のしゃれた西洋館建ての「写真館」の主人である写真師と、写真を撮りに来る、ある軍人家族をとおして、太平洋戦争に至るまでの時代の流れを描いており、心温まるアニメ版叙事詩である。

丘の上に見える、小さな楼閣風のレンガ建ての館が、この映画の舞台である「日の丸写真館」だ。丘の下の道には人力車が走り、やがて時代と共に鉄道馬車へ、そして路面電車が走り、その電車には日章旗と旭日旗が付けられ、沿道は戦勝に酔うのぼりがひらめいている。

その後、関東大震災、太平洋戦争、東京大空襲、戦後の復活で大都会に発展などが、写真館を取り巻く周辺の風景として描かれる。

この映画の主演となるのが例の軍人家族だ。最初は、軍服姿の軍人が婦人を伴って、人力車から降り立ち写真館を訪れる。どういう訳か、撮るのは婦人だけのワンショットだ。初々しい婦人は、うつむいて視線を上げないので、館主の写真師は裏庭から満開のゆりの花を摘んで、女性に持たせる。すると、女性は思わず笑顔でレンズに視線をむけると、無事マグネシウムのボン焚フラッシュが光って OK となる。

その後もこの軍人家族は、ことあるごとに写真を撮りに訪れる、行きつけの客という関係だ。時代と共に、この家族にも女の

子が生まれ、娘へと成長し、軍人である夫は戦死する。娘はその後結婚して子供たちをもうけたが、多分戦場出兵と東京大空襲で全てを失ったようだ。

時代は移り、娘もやがて初老を迎えたが、あるときその初老娘が、ゆかりの写真館を訪れる。寂びれてしまった写真館には「休業」の貼り紙があるが、ドアを開けて中に入ると、なんとそこには、あの愛嬌たっぷりだった写真師が、老人の姿で臥せていた。娘は手慣れたようすでお粥を作り、老写真師に食べさせる。

そして、二人はそれとなく写場のソファに、並んで腰かける。老写真師がエアリリースのゴム球を握りしめて、2 ショットの写真を撮る。出来上がった二人の写真には、いくらか微笑む初老娘の姿があった。

娘と写真師とは、どうしてこのような関係になったのだろうか。実はこの娘の撮影には、写真師はさんざんに手こずった経緯がある。この娘は、赤ん坊のときに初めて来たときから、成長に合わせて何度も訪れているが、笑わん殿下ならぬ「笑わん娘」だったのだ。写真師は、赤んべをしったり百面相をして見せたり、いくらあやしても、目をつり上げて、口をへの字に結んでいる。

この写真師の仕草や表情、おかつぱのような髪型、リボンタイにチョッキという服装、この映画の作者が、写真師の表現に注いだこだわりが感じられる。この作品は、セリフが全くないサイレント映画で、印象的なピアノの演奏が、時代を感慨深く表現している。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員